

## 息を合わせて、スペースを埋める

「精も根も尽き果てるような働き方をせずとも、安全な医療を提供したい...」。これは、ある病院の女性外科医の言葉である。いま、勤務医の労働環境は厳しさを増す一方であり、小児科・産科・外科系など少なからぬ診療科で、勤務医が激務に耐えきれず病院から立ち去りつつある。勤務医が、自らの職場環境を改善していくためには、何が必要なのだろうか。

私が所属する栃木県医師会勤務医部会では、県内勤務医の労働環境の実態を調査した。その結果、長時間労働による悪影響として、健康不安（肉体的、精神的）や医療事故の誘引などが懸念されていた。労働環境悪化の原因は単なる医師不足だけでなく、医療の高度化や医療制度の問題など複合的である。このため、すべてが病院内で解決できるわけではないが、他職種との協力・連携・役割分担によるチーム医療の推進や業務内容の効率化、勤務時間の見直しなど、できる所から改善するしかない。また、医療現場の声を積極的に社会に発信することも大切だ。

チーム医療といえば、病院の医療をサッカーに例える考え方がある。サッカー選手はポジションごとに専門性があるが、試合の状況によっては選手が立場を超えて守備に回ったり攻撃に参加したりする。つまり、自分の専門以外にも「スペースを埋める仕事」をしているのだ。

病院にも多くの職種があり、各々が専門性を発揮しながら協力し合い、時には職域を超えて行動することが求められる。医療が専門化・細分化すればするほどスペースが生じるため、各職種が専門性に固執することなく積極的にスペースを埋めなければ、チームの勝利としての「良い医療」は得られない。

チーム医療はまた、「息を合わせる」ことでもある。大勢の人間が力を合わせて何かに取り組む時は、必ず声を出して息を合わせる。「息を合わせる」ことは他人を尊重し、他人を思いやる心を持つ事に通じている。「息が合う」とは人との関係がうまくいっている状態であり、コミュニケーションの基本でもある。

いま、医療を取り巻く環境は大変厳しい状況にあるが、チーム全員が息を合わせて協働作業を行い、患者さんから信頼され、職員にとっても働きがいのある病院を目指して努力していきたい。

「息」という字は「自」らの「心」と書くように、その時のこころの状態を映すものなのだ。

（2008年11月24日 下野新聞「しもつけ随想」）